【シンポジウム「超越と死」提題】

西洋近代哲学における「超越」

木阪貴行

○ 近代ヨーロッパへ

さて代表的な西洋諸国の場合でも、19 世紀初めには平均寿命はまだせいぜい 30 代であった。ようやく 20 世紀に始まる出産調整などもちろんないこの時代、多くの子供が生まれては成人にならずに死んでいたのである。かつて「死」は 21 世紀の日本と比べるとかなり日常的なものであったのかもしれない。死が常に現実的なものとして意識されている世界では、ただたんに死を避けようとする消極的な生は意味をなさないだろう。眼前の事実から人生はやがて無に帰することがまったく確実であるとき、私たちは生き甲斐をどこに求めるべきなのか。

西洋思想の伝統では、たんなる生を超える積極的な生き方の原理を、伝統的に「善」と呼んできたともいえる。「善」（倫理学の主題！）はそういう意味では明確に「超越」であった。例えばソクラテスが自ら死を選んだのは、たんに生き延びることでは実現できない善い生き方、たんなる生を超える価値のためであったことは間違いない。哲学の場合も宗教の場合も、ヨーロッパの文化的伝統の中では、たんに死すべき生を乗り越えようとする「超越」としての「善」が問題の核心にあったといえる。まずはこのことをもう少し具体的に、提題範囲として私に割り当てられた近代哲学の中で確認してみよう。近代のヨーロッパが成立する頃、人々の生の意味を定めていたのは、哲学というよりはむしろキリスト教文化である。このことを考慮しつつ、近代哲学の一断面を回顧することになる。

○ 見えないものと見えるものの間

「超越」は一方で、手に触れることはできず、また目で見ることもできない。だが他方、完全に見えない「超越」は、そもそも相手にしようがない。私達は現に「超越」という言葉でそれを相手にしていると考えることもできる。私達

は見えるものしか相手にできないとしても、例えば、「神」とか「死」という言葉は、たんなる雑音やインクのシミではない。

人間は、恐らくは地球上の他のどのような生物とも異なり、見えないものを見えるものによって表現する動物である。だがこの場合、表現するものと表現されるものとの間には、見えるものと見えないものという本質的な差異があり、それを表現という仕方で結びつけるに当たっては、やはり様々な緊張や軋轢、あるいは矛盾が生じて来る。「超越」を可視化することの虚偽と真実の狭間には実に様々な対立がある。

○ 17 世紀のヨーロッパ

哲学史を学べば近世哲学の端緒にデカルトが登場するが、デカルトが活躍した 17 世紀は、美術史、あるいは文化史的にはバロックの時代とされる。ところがデカルトは必ずしもバロック的ではなかった。

バロック的な時代思潮は、16 世紀に起きた宗教改革に対する、ローマカトリック教会の巻き返しとその成功から始まる。その成果は 17 世紀初めからずっと長期間にわたって改築された、ローマ教皇庁のサンピエトロ大聖堂に見ることができる。伝統的宗教の必ずしも目に見えない内容を壮大で劇的な見えるものによって人工的に表現しようとする一大プロジェクトであった。天国へ至る地上からの通路として、カトリック教会というまさに見える存在をクローズアップすることになるように、聖書の内容を芸術的に想像して、壮大で劇的な見えるもの(絵画、建築、装飾)によって見事に表現したのである。神秘的な権威を示しているその華美で劇的な特質は、例えば 16 世紀の宗教改革の混乱の中で世紀末的な「死の勝利」に脅えていたようにも見えるブリューゲルの絵画と比較すれば、より明白になるだろう。

ところが哲学者デカルトが特に警戒していたことは、いわば精神の目が、想像力によってその純粋性を奪われることであった。戦場に赴いたこともあったデカルトにとっては、宗教戦争を引き起こしてもいる宗教的なメッセージよりも、個人の内面精神の自由の方が大切であった。この点で、フランス的バロック(ルイ 14 世の時代)の少し前に活躍したデカルトは、フランス人ではある

が必ずしもバロック的ではない精神を有していたと言ってよい。むしろ彼は北方のドイツ等で思索を展開し、理性による自由な精神によって明晰判明な仕方で数学を使う厳密な科学を構想した。主著『省察』の中でも、数学的理性は自らを想像力から徹底して浄化するときにのみよく機能すると主張している。この意味ではデカルトの思想は、宗教的にも最も自由であった新興市民によるプロテスタントの国オランダの精神風土に近い面を有している。

○「近代理性」の始まりと「超越」としての人間

カトリック的な仕方に従うと、人間の生は霊魂の神秘的な宗教的永続性によって意味付けられる。さらにバロックの芸術家達は、霊魂不死と神による救済ということに基づいて、人間の生の意味を想像力によって劇的な仕方で見事に可視化した。だが、神秘的で見えないものに想像力という組み合わせから出てくるものほど疑わしいものはないかもしれない。

いわゆる「方法的懐疑」によって疑わしいものはすべて排除しようとしたデカルトは、目の前に感覚を通して見えている現実世界の根底に、たんに感覚的に見える世界を超える純粋に数学的な世界があると考え、それをあくまで理性によって明晰判明に把握しようとした。デカルトが目指していた人間とは、現実世界の根底を支える、想像力や感覚的能力を超える数学的な構造を、理性によって厳密な仕方で把握する知性としての人間であった。自由な精神とはそのような理性でもある。デカルトにとって、自由な精神であり理性である「コギト」は、〈 永遠の今 〉を生きる規範的な数学的理性である。そこでは人間自身がある「超越」となる。この点をごく簡単に説明しよう。

○ 理性的精神の規範的永遠性

時間には少なくとも、ある意味で矛盾する二つの様相がある。まず、私達は常に「今」の中にあり、実は直接には「今」しか経験したことがない。「今」は直接に感覚の現前とともにある。そしてなにかが「ある」とはまずは「今ある」ことである。この意味で、時間の一方の様相は、失われることのない、つまり永遠の「今」という様相である。だが他方で、時間は常に流れ去っていく。

「今」は次々と「さっき」となり、過去となり、つまり失われて今はないものとなる。喪失したものの在り方である過去の様相である。この二つの様相それぞれを煮詰めていくと、一方では完全な現在性、つまり失われることのない永遠の現前性となり、他方では、消滅あるいは喪失の形式としての過去となる。

決してその存在を疑うことのできない「コギト」は、デカルトにとって完全な現在性のもとにあり、つまり失われることのない永遠の現前性を保つことができるのでなければならなかった。シンポジウム提題という場では詳論することはできないが、「西洋哲学史」等でデカルトの「方法的懐疑」や「コギト」の思想に触れ、あるいは「演習」で『省察』の邦訳を読み、さらに「卒業論文」でデカルトを扱った場合に、それぞれの仕方で皆さんが了解しているとおりである。

ところで、自己が自己に対して完全な仕方で現前する永遠性というこの考え方は、疑っている自己それ自体は疑うことができない、というような程度の議論を超えてしまっている。デカルトの「コギト」はたんに事実の話ではなく、それを超える自己のあるべき姿のレベル、つまり事実に対しては「超越」とならざるをえないような規範の次元で初めて成立するのである。

デカルトは純粋意識という内面的規範によって人間を特徴づけた。これは近代的な自由と平等の基礎となる。デカルトにとって明晰判明な理性認識という規範はそのまま幸福への通路でもあった。さらに「コギト」の規範的永遠性は、キリスト教文化の基盤にある霊魂不死という考え方とも、少なくとも矛盾は起こさない。

「コギト」は宗教的メッセージや想像力とは別次元で、やはりたんなる生と死を超える規範的存在である。方法的懐疑の頂点で永遠の「今」に達した規範的な理性あるいは純粋意識は、流れ去っていく時間の在り方を「超越」してもいる。

○ 18 世紀　バロックからロココへ

もともとは宗教的目的を有していたバロック的な表現の在り方は、すぐに絶対王政の政治権力（ルイ 14 世の場合が典型）と結びついてやがて世俗化し、

宮廷文化に浸透し、さらには上流市民の幸福な生をも演出するために、宗教からは離れて行く。やがて 18 世紀になると、バロック的な美意識は、むしろ地上的な生を華やかで優美な仕方で享楽する文化を育むことになった。大雑把に 18 世紀は、美術史、あるいは文化史の区分でロココと言われる時代である。マリー・アントワネットがヴェルサイユで異彩を放ち、イギリスでは産業革命が進展し、さらにはまた、アメリカ独立戦争やフランス革命という市民革命が起きた時代である。

世俗化が進んだロココの時期を代表する絵画（例えばフラゴナールやウィリアム・ホガーズ等）には貴族や上流市民が生と性を軽やかに享楽している様子が現れた。あるいは、当時、古い時代のゴシック様式からロココ様式に改修された、同時代人モーツァルトゆかりのザルツブルク、「聖ペテロ参事会聖堂」を訪れると、華麗荘厳に装飾された会堂とそこに流れていたであろう音楽を背景にした当時の例えば葬礼といったものが彷彿としてくる。16 世紀のブリューゲルの絵画に見られたような「死の勝利」に対する不安は、優美で快活な生活の中、日常的に目に見える教会の壮麗な建物とその会堂の中で行われる儀礼によって、いわばかき消されてしまっていたことでもあろう。

この時代には、現代にも通じると考えられる、目に見える日常の安穏で幸福な生活とそれによって隠されている非日常のもの（典型的には例えば死）との懸隔が、徐々に大きくなり、しかもその亀裂を日常的なものの秩序のもとに均一化して処理する近代文明の特徴が顕わになって来る。死の現実性とそれへの不安を希薄化しようするかのように、日常的にはそれを建築や絵画、音楽によって隠蔽したようにも見えるし、また、快楽の優美な追求は性的タブーの希薄化も生んだ。比較的まとまった数の裕福な一部の人々は、老・病・死やその他の桎梏から解放された時代が到来したというように感じていたかのごとくにも見える。だが実はそれは、近代文明が「超越」を失うという問題をすでに引き起こし始めていた、ということでもある。

○ カントの場合

18 世紀も終わりに近づいた時期に活躍したカントは、自身もなにぶんかはロ

ココ的な生活様式で暮らす中、宗教伝統の儀礼化、装飾化を身をもって体験していたと思われる。人間の幸福は目に見える次元で追求するしかないにしても、表面的な幸福のために人生の道徳的意味が見失われる状況に直面していたカントは、感性的なものの意味はたとえ否定するべきではないにしても、それを過大評価することは避けなければならないだろう、という方向で考えた。カントは、目に見える感性的なものを超える、見えない「超越」への通路を、自律的で理性的な道徳に求めることになる。

「概論」や「哲学史」で学んでいるように、カント倫理学における「人間性」とは、自律的理性による道徳的義務の実現が結果としてもたらすべき目的のことである（道徳法則の目的の公式：「君及び他人の人格の中にある人 間性を、つねに同時に目的として扱い、たんに手段として扱わないように行為しなさい」を想い出そう）。この場合、「人間性」とはさしあたり、理性的道徳に従う理想的な幸福の可能性のことである。だが、たんにそれだけでもない。

○ 神存在と霊魂不死の要請

カント倫理学では幸福と道徳との理想的な一致を「最高善」というが、実はそれは私たちが生きている現実世界では実現不可能であることを確認するところで、倫理学は宗教的、神学的な問題に繋がるものとして議論されるようになる。カントは、最高善の実現を道徳法則が求めていることを梃子にして、「霊魂の不死」と「神の存在」を理性が「要請」するのだという。以下にその最初の部分のテキスト（『実践理性批判』から）だけを採録しておこう。

純粋実践理性の要請としての霊魂の不死

世界の中に最高善を生じさせることは、道徳法則を通して規定可能な意志の必然的な客体である。ところが、諸心術が道徳法則と完全に合致していることが、この客体において最高善のこの上ない条件である。だからこの合致はその客体と同様に可能でなければならないことになるが、それというのもその合致は、最高善を促進するべしという同じ命令の中に含まれているからである。ところで道徳法則への意志の完全な合致は神聖性であり、感性界の理性的存在者にはその現存在のいかなる時間点においても能力の及ぶことのない完全性である。

ところがそれは実践的に必然的なものとしてこれまた同様に要求されているので、すると、それを見いだすことができるのはそのような完全な合致への無限に進みゆく進行としてのみであるから、こうして純粋実践理性の諸原則に従ならば、そのような道徳的進行を意志の実在的な客体として受け入れることが必然的なのである。ところがこの無限の進行は、同一の理性的存在者の、無限に続く実存と人格性においてのみ可能である。（強調はカント自身）

カントにとって目的自体である道徳的人間性はまた人格性でもあるが、それは私たちが日常的に生きている生の時間を超える無限の、崇高な課題を担っている。霊魂の不死といったことに関わるこのような生の感覚は、キリスト教文化の中で血肉化した価値意識なしには成立しにくいだろう。だが私たちにしても、例えば無限に続く道徳的努力というものについて考えてみると、個々の成果をその無限の課題と比較すれば、成果は常にほぼ零、すなわち無にも等しいものであることになり、それを知りつつもやはり努力し続ける人間には、その無にも等しい生にそれを超える意味を与える理念が生きていたことを見出すことができるかもしれない。

思想を研究するとは、そのように時代と地域を異にし、違う文化の中を生きている人間の在り方を、私たち自身の生の感覚によって位置づけて理解する試みである。そのことによって、研究対象である思想が成立して来る生の在り方と、私たち自身との生の在り方が、ともにゆっくりと明らかになる。

○「超越」としての「善」

さて、近代ヨーロッパの文化的伝統の中から、たんに死すべき生を乗り越えようとする「超越」としての「善」が、デカルトとカントの場合にはどのようにとらえられていたかを概観した。たんに死すべき生は、それ以上の意味を与える何らかの実質的な価値体験を通して乗り越えられることによって、「超越」への通路となるかもしれない。

だが 19 世紀以降ヨーロッパにおいても、乗り越えられるべきものとしての死の意味は希薄化していく。これは一般に産業社会において平均的に幸福な日常性が人々の生活に浸潤した結果でもあろう。幸福な日常性の中で見えにくく

なる死を普段は忘れていることができるので、そのことについて考えることが希薄になるからである。とはいえ、シンポジウムの展開の端緒を開く役目を担っている最初の提題として、地域的にも時代的にも様々な諸思想を学んでいる皆さんに対して問題をもっと立体的に示しておきたい。つまり、そもそも私達日本人の文化的伝統のもとでも、デカルトやカントにおいてそのように前提されていたように、私たちの目に見える生とは、「超越」へ飛躍するために日常的ではないなんらかの仕方で自ら乗り越えられなければならないような、たんに死すべき生にすぎなかったのだろうか。

○「超越」という考え方に対する疑問

明治以降の日本を代表する倫理学者、和辻哲郎は、カントの思想に見られる個人主義的な「超越」という問題構成を、「肉体性」の問題を無視してしまっているという点で困難を含むものでもあると批判した。カント研究の文脈で和辻が書いた論文「カントにおける「人格」と「人類性」」で和辻は、カントにおける「人格の二重性」に注目しつつ特にこの点を指摘しており、そうすることによってカントの立場を乗り越えようとする議論を展開している。ヨーロッパ的ではない、自然的共同態という日本的な人間の在り方を、「間柄」という仕方で拾い上げるのが和辻の立場である。ここで問題は、ヨーロッパ的な神の前に立つ超越的個人の協働か、それとも「間柄」におけるより自然な日本的共同か、ということにもなる。

****

以上、シンポジウム全体を臨みつつ近代ヨーロッパの観点から提題した。19世紀以降から現代のヨーロッパ、さらには日本的伝統の吟味、これらが次の提題となる。